

## 令和2年度第3回一関市総合計画審議会 会議録

- 1 会議名 令和2年度第3回一関市総合計画審議会
- 2 開催日時 令和2年9月30日（水）午後1時30分から午後3時30分まで
- 3 開催場所 一関市役所 議員全員協議会室

### 4 出席者

#### (1) 委員

阿部新一委員、砂金文昭委員、太田久美委員、大沼佐樹子委員、小山亜希子委員、菅野佳弘委員、小岩邦弘会長、佐藤弘子委員、東海林訓委員、菅原君代委員、菅原敏委員、菅原行奈委員、菅原正弘委員、須藤壽弘委員、千田博委員、千葉哲夫委員、辻山慶治委員、徳谷喜久子委員、中尾彩子委員、畠山育美委員  
欠席委員 伊藤一樹委員、千田久美子委員、原田哲委員、三浦幹夫委員、水谷みさえ委員、吉田正弘委員、若山義典委員

#### (2) 事務局

佐藤善仁副市長、高橋邦夫副市長、石川隆明市長公室長、菅原稔市長公室次長兼政策企画課長、鈴木敏宏政策企画課政策推進係長、小野寺知之主査、熊谷尚孝主事

### 5 議題

一関市総合計画後期基本計画の策定について

ア 後期基本計画「主な指標」項目一覧について

イ 総合計画後期基本計画 第1部重点プロジェクトについて

ウ 総合計画後期基本計画 第2部分野別計画について

エ 総合計画後期基本計画 第3部まちづくりの進め方について

### 6 公開、非公開の別 公開

### 7 傍聴者の数 1人（報道機関）

### 8 小岩会長挨拶

お忙しいところ、お集まりいただきありがとうございます。本日は、2時間の時間を取っていただきました。この審議会から市長へと答申を行う期日が11月10日となっております。実質、じっくりと審議できるのが今回と次回の2回程度と考えております。本日の進め方は、議題アを説明していただいて、議題イ、ウ、エを一括で説明した後に、皆さんから必ず一言ずつ発言していただく時間を取って進めていきたいと思っています。時間も限られているので、意見書等も活用していきながら、11月10日に向けて進めていきたいと思っています。

## 9 審議内容

一関市総合計画後期基本計画の策定について

ア 後期基本計画「主な指標」項目一覧について

資料No.30-1、資料No.30-2により事務局から説明を行った。

以下、委員からの意見等。

委員 前回、多面的機能支払制度の関係で指標に加えて欲しいということ意見を述べたが、今回入れていただき、ありがたく思う。多面的機能支払制度の事業でも、1号事業は多面的事業支払交付金であり、2号事業は中山間地域直接支払制度の事業、第3号は環境保全型農業という3本柱となっているが、それを一括りにして多面的ということの捉え方なのか、そのあたり担当課の考え方はどうだったのか教えてもらいたい。

委員 具体的な指標項目はどこ部分になるか。

委員 指標No.17、18になる。

事務局 今回、新たに指標として追加した指標No.17、18については、多面的機能支払制度に取り組むものを示す指標のみとしている。中山間等については、指標として入れていないところである。

イ 総合計画後期基本計画 第1部重点プロジェクトについて

ウ 総合計画後期基本計画 第2部分野別計画について

エ 総合計画後期基本計画 第3部まちづくりの進め方について

資料No.27-1、資料No.27-2、資料No.28-1、資料No.28-2、資料No.29-2、資料No.29-2により事務局から一括で説明を行った。

以下、委員からの意見等。

委員 現状と課題について明確にしたほうが良いという意見や、分けたほうが良いという意見が、前回からあったと思うが、それらはどうなったのか。

事務局 本日の及び資料No.29-2の4ページの指標No.25で現状と課題の項目について回答しているが、文章量を調整することも含めて、現状部分、課題部分が分かりやすい形になるよう調整中である。

委員 現状と課題について、分かりづらい部分があるということは理解できるが、前回出ていた意見なので、今回意見させていただいた。

委員 私は、商業、工業、観光の分野を特に見させていただいた。内容としては、案として示されている計画でよいと思っている。後で、小岩会長からも話があると思うが、本日、市長にまちづくりランドデザインの提言をさせていただいた。多くの市民に参加していただいて作ったものであり、総合計画とは別な形で議論

しているものだが、少しでも今後の市政に反映されればと思っている。

委員 私は文化面のところを特に見させていただいた。資料No.29-1の51ページのところで、前期基本計画と比べると現状分析もしっかりされていて、内容的には前期基本計画よりも豊かになっていると感じる。しかし、市全体の産業とか教育とかの中で、文化面という位置付けが弱いという印象を持っている。

51ページの中で表現されている内容の中で住民参加型の文化芸術活動の振興というのは非常に良いことだと思う。そこにもう1つ、その文化芸術活動の環境づくりに力を入れて欲しいというのが私の要望である。博物館の展示機能の充実や、それを支える芸術活動の展示箇所を設置、市の中心部に文化芸術を推進するための施設の建設など、文学館や美術館のような文化施設を設置して、文化面における住民へのサービスを提供していくことを年次計画で進めていただきたい。計画書の中に表現的にどう盛り込むかは、意見書で述べさせていただく。

それから、民俗芸能の保存継承活動は是非やって欲しいと思う。とりわけ、この地域は民俗学的に貴重な地域なので、その取扱いは重要で、日本全国からも注目されている土地だと思っている。また、民俗という捉え方を民俗芸能だけに特化するのではなく、埋蔵文化財の関係もあるので、市民にそういう環境を提供するというのは大事なことだと思う。以前、県の埋蔵文化財センターによる舞川の清水遺跡の調査があった。道路建設に伴い、すぐに埋設してしまったので、縄文遺跡群にはまだなっていない。埋めているだけなので、これからの開発の仕方によっては、三内丸山遺跡あるいは世界遺産登録を目指す流れに乗るくらいの重要な遺跡群が北上川西斜面に続いている。そういうところを各自治体と提携しながらポイント調査をしていただきたい。もう一つは、一関の持っている中世からの歴史的経過について、市民に身近な資料という形で紹介していただければと思う。民俗文化というのが、決して民俗芸能だけではないという視点について、文化財課を中心に検討していただければと思う。

委員 今回示された分野別計画では、まちづくりスタッフ会議の意見が多く反映されているのを感じた。市民の声を直接聞く機会がなかなかないが、かかりつけ医のところなど細かいところも市民と行政のギャップを緩和するような形で、分かりやすい計画書になったという印象を受けている。

委員 資料No.29-1の73ページに記載された、かかりつけ医の件で、市民が病院の役割やその違いを理解して適切に受診するようにと書いてあるが、その適切という括りが分からないというのが、まちづくりスタッフ会議での意見であった。

まちづくりスタッフ会議に参加していた行政の方も消防の方も、かかりつけ医

をどのように判断したらいいかが分からなかった。もともとの出発点は、医療データを集積するために、かかりつけ医を持っていくという目的だったはずだが、それも無くなってきている。結局、ルールを作る方は曖昧に作っているのに、それを市民に理解しろと言われても困ると思う。ルールができていたので、根本からかかりつけ医という概念を再構築してから周知しますというのであれば理解すると思うが、ルールとして固まっていないものについて、自分たちで判断して実施するようと言っているようにしか感じられない。

このままの文言で総合計画に盛り込まれると、この問題に注目している市民の方々が、また自分たちで考えなくてはいけないのかと感じてしまう。形あるものにしていくのであれば、ここの文言はガラッと根本から変えるべきだと思う。74ページの市民の参画の項目で、かかりつけ医という文言を消していることもあり、かかりつけ医という概念に自信がないから消しているのではないかと感じる。

また、資料No.29-2の現状と課題が分かりづらいという意見について、現状も課題も長い文章の中に埋没している点が問題だと感じる。例えば児童数が県平均、全国平均と比べてこうなっている、現状のまま進むと、学校が1つになります、だからこうしますというように理解しやすい構成だと良いが、長い文章になっていることで単なる読み物になっている。今のままでは説得資料になっていないので、レイアウトや構成を検討するのはこれからということなので、しっかり検討してもらいたい。

委員 一番気になっているのは、ここまで練りこんでいった計画を私たちの生活に落とし込んでいくところで、その成果は指標でしか確認できないということを懸念している。前回の前期基本計画策定のときにも策定に携わった私自身が、実際、完成した冊子を開いて目を通すことがあまりなかった。皆さんで作った計画をどれだけ目を通して、市民が想いを受け取っているのかと考えると、総合計画審議会が策定した計画の周知も今後大事だと感じている。

委員 資料No.30-2の2ページの指標No.36について、指標の考え方としては、この施設が何のために有効活用されているかというのが指標であると考えているが、この指標No.36の指標の説明が来訪者数を示す指標となっている。骨寺村荘園交流施設は、骨寺村荘園遺跡の重要性、歴史などをいかに知ってもらおうかという施設であると思う。そうすると指標の説明のところに、遺跡の重要性を理解していただいた人の数というのが指標の説明として載ってきて、実態として施設を訪問された方が何人だということになるべきだと思う。これに限らず全体を通して、指標の説明のところでそう感じるところがあるので、一通り確認していただければと

思う。

委員 SDG sという言葉が今取り沙汰されており、この計画でもSDG sの推進という項目がある。しかし、地域の人たちの誰がどのくらいSDG sという言葉を理解しているのかと感じている。市民に対して説明会を実施するとの記述があるが、浸透するには程遠いレベルだと思う。SDG sと、この計画の繋がりが見えてこないというのが印象であった。

委員 一関市も他の市町村に負けずに市民の意見を聞きながら計画策定に取り組んでいるところだと思うが、言うなれば平均的に無難な市になろうとしているということを感じている。どうしても人口減少になることは否めないというのは、どの市町村も同じであると思うが、産業のところで、日本で生産しても中国やアジアの単価に負けてしまうという現状もあり、人口の流出も止まらない、所得が下がれば子どもも減少していく。

ただ、一関市が他の市町村にはない特徴的なものを持てば、それによって他のところから人が来ると考えている。例えば、自動車税が他の市町村と比べて半額になるとか、車検代に対して市から補助金が貰える市であるというようなものがあれば、人は住んでみたいと思うのではないか。そういった、思い切った特徴のある施策を出すだけでも一関市のネームバリューが日本に知れ渡るのではと思う。

前回、意見書で出したのは薪ストーブの件であるが、一関市に住めば薪ストーブと過ごし、自然と一緒に過ごせるような特徴のある市ということでもよいと思う。文化面では骨寺荘園遺跡のような、古い文化のところで薪ストーブで生活できるというような特徴もあると思う。何か、他の市町村に負けない味のあるものを出していければ面白くなっていけると感じている。

委員 資料No.29-1の77ページのところ、民生委員や児童委員や各種相談窓口に相談するようにと書いてあるが、現状的にはその仕組みを知らない人もいる。その仕組みを周知していくところも欲しいのではないかと思った。

委員 資料No.27-1の4ページ、5ページのところ、Society5.0の項目であるが、情報通信技術との記載があり、情報通信技術ではSociety4.0ではないかと思う。また、6ページの子育てのところでも情報通信技術という文言があるので、この部分についてSociety5.0を示唆した内容の記述になるとよいのではと思った。

また、資料No.28-1のSDG sの推進の項目のところ、第1部でSDG sの具現化という文言があるが、具現化に対応するようなことがこのSDG sの推進の項目に書かれていない。一関市がSDG sを掲げて何をしたいのかというところが、この部分から伝わってこなかった。そこの部分をしっかり、書いておかないとい

けないと思う。

例えば、先進地である小田原市では「いのちを守り育てる地域自給圏」というのをSDGsで掲げて実施していて、そういったところから人づくりをやっている。何をやるのかのところは謳われていないと、SDGsと言われても何のことなのか分からない。一関市でSDGsを掲げて何をしていくのか見えてこないの、例えば、後期基本計画の期間をかけて作っていくというのがあれば、それでもよいと思う。

また、市の色々な計画にSDGsが絡んでくるが、市職員に聞いてもSDGsについて分からないといったことがある。まず、市職員がSDGsのことが分かった上で説明できて、それを市民に説明していくというのが必要だと思う。一関市ではSDGsで、こういうところを重点に進めていくというのを伝えられるようになっていって欲しいと感じた。

委員 自分は観光分野の人間なので、観光のところを見たが、前回の前期基本計画とあまり代わり映えがしないことについて、実際に携わっている自分自身が、この5年間に新しいビジョンを見出してこなかったというのを反省した。これまで、いろいろな機会細かいところは意見を言ってきたが、大きく一関市の観光に関して分野的に取り組めなかったのかなと感じている。

また、一関市では、観光について、日本版DMOと言って民間の組織で観光を担ってくれている団体があるが、その要素も計画から抜けていると感じた。全体を通して思ったのは、私たちは大きな視点と小さな視点を同時に持ちながら意見を言っているが、細かいと思っても分野ごとでこだわりのある私たちが言っていくしかないの、今後も意見を言っていくべきだと思った。

委員 前回、一関市の重点プロジェクトであるILCについて、私の考えているところを述べさせてもらったが、一行も取り上げてもらっていない。その後、動きがあったようで、研究施設設置の事務局である旗振り役の高エネルギー加速器研究機構が旗を降ろしてしまったという報道があったが、これで完全に外堀が埋まってしまったと感じている。したがって、この総合計画の「てにをは」を直すとかの次元の問題ではなくなってしまったのではないか。ILCを実現するには、後は政治力しかないのではないかと考えている。政治力で政府を押し切ることができるのかということだと思う。一関のまちは良いまちだと思いたいが、無いものねだりをしているようなまちの印象を与えないように、今後しっかり情報収集をして、どういう手を打てば実現できるのか具体的に考えてもらいたい。

委員 前任者が退職ということで、途中からの参加であったが、内容的には広範囲に

わたる計画であると思う。私は、教育のところについて見させていただいた。今回、新たに、ICT関係のところも計画に入れていただいたが、文科省でも対面授業とリモート授業のハイブリット化というのを打ち出しており、ICT化についてはやっていかなければいけないところでもある。また、子育てに関連するところで、様々な子育て支援政策を実施しているが、女性の社会参加や就労関係については経済的な政策としての側面が強いと思う中で、計画の中に一行だけだが質の高い幼児教育という言葉があつてありがたいと感じている。

先進国になればなるほど、非常に支援の必要な子どもが実際に増えてきている。義務教育や公共教育については書かれているが、就学前の教育、義務教育にどのように繋げていくかということも少子化の中で大事になると思っている。

最後に、私にも夢があつた。ILCが実現して、市内の学校で、一関市の子どもたちと色々な国の子どもたちが机を並べて一緒に学んでいる姿を想像していた。あと50年くらい遅く生まれて、その時代に教師をやりたかつたなと思っていた。最後の話は余計であつたが、以上である。

委員 計画を作る前段として、協働のまちづくりをしながら計画を達成していくとあるが、各地区の協働体が地域づくりで作った計画をなるべく反映するような格好でお願いしたいと言ってきた。それについては、各地域づくり計画についても、吸い上げながら策定していますよという回答も伺ってきた。アンケートでもよし、まちづくりスタッフ会議での意見でもよいから、もっとボトムアップ的に、基本的には、各地域でやっている計画を反映して策定して欲しい。

周知については、前期基本計画のときもあつたが、策定した計画のダイジェスト版として各家庭に配布しながら、5年間やったことを踏まえて、また、今後の5年間の計画はこうなったというのを市民みんなで共有していく体制をとってもらいたい。

また、まちづくりの指標のところ、市民センターの利用率となっているが、どういう活動をしていくのかというところの指標を取ればよいのではないかと思った。市の職員が情報をいっぱい持っているので、様々な情報をいただきながら地域づくりに生かしていければと思う。

もう一つは農業者という立場で、農林業の分野についていろいろ意見させてもらったが、中山間地域とか多面的機能とかの制度について、事務的な面が非常に複雑で、始めたけれども、途中で辞めてしまったというところも出てきている。市の指導をいただきながら、発展させていけるような支援等があれば良いのかなと思う。

委員 資料No.29-1の59ページのところで、修正がされているということで、まちづくりスタッフ会議の意見がいくらかでも反映されているのは良かったと感じている。

また、資料No.30-2の2ページの指標No.34において観光ボランティア登録者数が指標となっているところで、昨日、この観光ボランティア登録の講座を受けてきた。現状数値が75人となっており、5年後の目標数値が75人になっているが、確実に私1人は増えるので、もっと増やした目標でも良いのではないかと感じた。一関市はこれから人がどんどんやってくる。私も観光ボランティア活動を頑張るので、夢があるような数値目標にしてもらえたらと思う。

委員 計画全体を見た感じでは出来がいいと感じており、一字一句というわけではないが、全体的には素晴らしいと思っている。しかし、資料No.29-1の86ページ、施策の展開(1)災害を防ぐまちづくりという項目があるが、感染症対策という文言が入っており、総合計画という何箇年計画にはそぐわないという印象がある。

今回の新型コロナウイルス感染症もそうだが、スピード感をもって対応していかなければならないので、何箇年計画というものではなく、感染症が出た場合は特別に対策をしていくというような文言でも良いのではないかとと思う。岩手は感染者が少ないというのもあり、意識が薄らいできているところでもあるが、こういったものはスピード感をもって対応していくというのが滲み出るような文言でも良いと思う。

また、次の項目の(2)災害に強いまちづくりの項目のところで、色々な研修や訓練を実施するというところで、非常に心強いものを感じる。災害が起きたときに、訓練の経験があることで、釜石市のような避難ができると思う。訓練を確実に実施できるように、地域に求めていくものがあるのも良いと思う。例えば、指標として、5年間の間に行政区単位で必ず避難訓練を実施するという指標があってもよいのではないか。これは、見える形の進捗率にも繋がっていくと思う。

委員 計画案なので、概念的なものになってしまうのは仕方ないと思うが、そこからどのように落とし込んでいくのかというものが、計画案に含まれていてもよいと感じた。きめ細やかに対応しますとあるが、きめ細やかとは何かについても具体的に落とし込んでいてもよいのではないか、ということである。

また、かかりつけ医の話についても、かかりつけ医の取組でうまくいっている事例などが全国であると思う。一関市がトップバッターでいろんなことをやりますというのが一番良いと思うが、そういうものはこの計画には無いので、他の県や市がやっていることを思いっきり真似してもいいと思う。真似したほうがゴールまで早いので、やってしまってから修正してブラッシュアップしてもよいの



ではと感じた。良いところ取りをしてスマートなものにしていくのが、一関市ですとしてもよいと思う。

また、読んでいて一関市らしさが見えなくてつまらないと思ったので、もっと面白いことしませんかという意見で、先ほど、他の委員の発言にもあったが、一点突破するようなことがあってもいいのではと感じている。それがどの分野でできるかを話し合う必要もあると思うが、これは一関市だけが突っ走ってやっている取組というのが見えているほうが、全体的に足並みを揃えてやっていくよりもよく見えるのではないかと感じている。I L Cについても、どんどん進むと魅力になっていったと思うが、I L Cを進めるためにいろいろと取り組んできた多様性のところで一関市は強くなっているはずなので、そこをもっとやっていっていいのでは思う。

また、細かい話だが、子育て支援や教育の分野の中で、「ことば」に関して、一関市は力を入れていると思うが、もっと研究者を入れて取り組んだほうがよいのではないかと感じている。ことばの教育と言っているが、一関市の教育と他の教育との違いは何か、一関市のことばの教育を受けた子どもと、受けなかった子どものコミュニケーションや言葉の使い方が変わったのかについて、審議会やワーキンググループで検証するのは不可能なので、研究調査の提案などをすると若い優秀な研究者が一関市のことばの教育について研究してくれると思う。

もう少し外部の手を使えるような方法を、各分野で、農林や観光もそうだが、企業だけではなく研究として出してくれるようなところと手を組んでいくことがあれば、私も手を組んでいけるところがあるのではと思っている

委員 一関市総合計画という素晴らしいものがあるというのを知ったことが私にとってプラスだったが、この計画を市職員や市民の方が知っているのかということ知らない人が多いのではと思っている。今回、立派な計画書を作る上で、こういう計画があるというのを市職員が自信を持って言えるようにしてほしいと思った。

また、一関市のアピールポイントになるものはないのかという話があったと思うが、私自身が子育てをしており、子どもたちも一関市総合計画について、立派な文言ではなくてもSDGsはこういうものであるということや、一関市はSDGsでこういうことをやっているということ、子どもたちが自信を持ってアピールできるようなものがあればよいと感じた。

先ほど、周知という点もあったが、大変ではあるが、伝えるということを一生涯懸命すると伝わると思うので、一関市に住んでよかったな、幸せだなと思えるようなものを計画の中で進めてもらえればと思う。

委員 事務的なところで、令和と西暦が混ざっているのが分かりづらい。例えば、I LCは平成25年の8月からという文言があるが、これは何年かというと2013年である。進捗状況がどれだけ明るい見通しとなったかをパッと感じるには、西暦なら西暦で表現してもいいのではと思った。

また、資料No.27-1の第1部重点プロジェクト、資料No.29-1の第2部分野別計画の表現に隔たりがあるのを感じた。結論を言うと、資料29-1のほうが進歩的になっていてよかったと感じている。

資料No.27-1の7ページにおいて、④資源・エネルギー循環の推進の項目で、ここでも新エネルギーや、自然エネルギー、再生可能エネルギーとかいろいろと似たような言葉が使われており、これを意識的に使うとしたら専門的になってしまおうと思うが、かえって分かりにくくなっているのではと思う。

また、新エネルギーの更なる活用というので一括りにされているが、2030年はもうすぐそこで、そのときまでにCO2排出量を減らさなければならないし、2050年にゼロにしなければならないのに、この5年計画として漠然としていると感じた。

一方で、資料No.29-1の64ページを見ると、書いた人が違うのではないかと思うくらい表現が違うので、確認してもらいたい。

委員 ここまで皆さんから意見、質問いただいたので、その点に関しての回答について、事務局から何かあるか。

事務局 回答は後ほどさせていただくこととして、ご意見を頂戴した中で何点かお話しさせていただく。実質、審議は、本日と次回のみということで、本日は、一人一人からご意見をいただいた。

まず、総合計画についてであるが、総合計画は市全般に関する、市の進むべき道を定める計画である。ご意見があったように、他の自治体とあまり変わらない内容であったり、特徴があるような尖ったものがないという意見もいただいたところで、確かにそのような点もあると思うが、若干、各々について重み付けをするために、第1部、第2部、第3部のような構成の使い分けをしているというのが正直なところである。

総合計画のほかに、総合計画にぶら下がる計画として、いろいろな分野の計画が30本以上あり、本年度は、そのうち19本の計画を総合計画の改定に合わせて見直すこととしている。その中では、総合計画の柱として書いてあるものをエッセンスとして、もっと発展的に幅を広げた具体的な取組を計画していくところである。

それから、SDGsについては、一関市がSDGsを掲げたのは、今年度が元年であり、ゴールは2030年ということであるので、どこまでできるのか分からないところもある。

全国どの自治体も国土強靱化とSDGsということで、頑張っているところでもあり、SDGsについて、一関市は何をやるのかという部分になると、本年度、そのSDGsの計画を策定して、国に手を挙げるということを予定している。全国で約30都市しか採択されない狭き門であるが、挑戦する予定である。

次に、ILCについて、文部科学省のロードマップに研究者サイドが一度手を挙げて、その後、手を降ろしてしまったということで、ILCは終わってしまったと捉える方も出てきているが、その点についてご説明したいと思う。文部科学省のロードマップというのは、どの項目を重点的に予算配分していくかという文部科学省予算の中での順位付けをするためのロードマップということになっている。そのロードマップへの掲載について、高エネルギー加速器研究機構（KEK）のほうで手を挙げて、その後、手を降ろす形となった。

それは、なぜかというとな全世界の研究者組織の動きが日本の研究者が書いた計画の一步前をいったというのが理由である。そのため、文部科学省に提出した計画書の内容と実態が合わないということから、取り下げたと聞いている。ただ、取り下げた経緯や、取り下げたことについて教えられたのが、半年も経ってからということは、我々も非常に残念に思っているところである。

しかしながら、物事そのものについては、終わったわけでも後退したわけでもなく、今までに無いくらいの動きが出てきている。日本という国がILCに興味、関心を持って、他の諸外国との話合いを始めたのは実は初めてであり、ILCの話が出て30年余りになるようであるが、国際間の動きとして動いているのはここ約2年間であり、ILCは終わっているものではなく、少しずつではあるが動いているということをお知らせしておきたいと思う。

最後に、総合計画絡みで、どのような形で市民に理解、周知をしていくかという点について、これは、市政のどの分野をとってもそうであるが、5年前は概要版として総合計画を全世帯に配布させていただいた。この在り方が良いのかという点について、見直していきたいと考えている。全体の計画を見たい方には、全体を確認できる方法を示しつつ、興味がある分野を見たい方にはその分野について深く確認できる方法をお伝えした方がよいという考え方から、概要版を全世帯に配布するという方法が、この時代に合っているのかという点も含めて、周知の

方法については今後検討していきたいと考えている。

事務局 そのほかの意見については、意見を整理し、担当課にフィードバックして回答したいと思うので、よろしくお願ひしたい。

委員 かかりつけ医については、非常に難しい問題だと捉えている。様々なものを見ると、かかりつけ医の定義のようなものは、身近にいて頼りになるお医者さんということになっていて、先日、市の「かかりつけ医ガイドブック」も見てみたが、かかりつけ医の定義は分からなかった。日本医師会などでも定義について抽象的にしか述べられていない。簡単に言えば、個人で開業しているような医者のようなものを言うと思うが、1つの病院に5人、6人も医者がある病院はかかりつけ医と言えるのか微妙なところもあると思う。

ここで、提案だが、一関型の受診体制のようなものを、医師会と保健センターで練って、かかりつけ医の一関としての定義をして市民に周知しても良いのではと思った。

あと、商業、工業分野について、実現もしないような夢みたいなことをたくさん盛り込みたいところだが、実践する立場として、この計画に書いてあるようなことが全部達成できれば良いし、指標も100%を超えていくようになればよいと感じている。

委員 コロナ禍において、真っ先にマスクの買い取り制度を始めたのは一関市であって、非常に良い取組だと思った。全国的にも有名になって、コロナ禍でもこういったことを実施できる市ということを誇らしく思った。また、指標について、各自治体様々な指標を掲げていると思うので、よい指標は参考にしていったらいいと思う。

委員 かかりつけ医について、全国の事例で病院が混雑するという事情もあるが、テレビの難視聴地域を解消する事業をやる時に、ケーブルテレビのケーブルを繋ぐので、そのケーブルを有効活用して、病院と家を繋いで簡単な診察ができるようなことをやっていた事例があった。少し前に一関管内の病院でもそういう取組をやろうとしているという話もあったので、逆にかかりつけ医にこだわらなくても、別な形で医療を整備できるような方法を考えてもよいのではと思った。

また、この前の台風の時に、一関市がペット同伴避難場所を全国で初めて実施した。これまで同行避難は今までもいろいろなところでやっていたが、同伴避難所ということで、屋内に犬と人が一緒に入れる避難所を開設したのは一関市が初である。だいぶ前に、一関市でルートが定まる前に犬を殺処分してしまって全国的にも話題になったニュースがあったが、今の一関市は、ペットと一緒に生きる

人たちを取り残さないまちだというアピールになると思う。

委員 かかりつけ医の考え方であるが、旧藤沢地域には病院は藤沢病院だけである。最初はそこに行って専門的な病院の紹介状書いてもらうということを地域でやっていた。

委員 現在、一関市のペット殺処分はゼロなのだろうか。私は、もう80歳近いがペットが欲しくて、保健所で貰えるかもしれないということで行って見たが、生年月日を聞かれて、断られた。殺処分を救いたいという思いがあるが、年寄りだからということで難しいということもある。

## 10 その他

一関市まちづくりグランドデザインの提言書について

事務局 この一関市まちづくりグランドデザインの提言書の取扱いについては、総合計画後期基本計画を策定中ということでもあるので、取扱いについて審議会会長に一任してもらうことを提案したい。

委員 例えば、農業団体であるJAいわて平泉から農業に関する提言書が出てきたら、計画に盛り込む意向はあるのか。

事務局 御存知のとおり総合計画は5年に1回の策定になるので、そのサイクルに合うか合わないかということもあるが、今回は一関商工会議所から動きがあり、提言があったので、受け止めていきたいという思いでもあるし、それは、他のJAなどの団体からあった場合も同様の思いである。

(一関市まちづくりグランドデザインの提言書の取扱いは審議会会長に一任となった。)

## 11 担当課 市長公室政策企画課